

## 「ある安息日に」

マルコの福音書 2:23～24

### はじめに

聖書に記されたイエシュアの言動、行動にはすべて意味があります。どこに行き、誰と出会い、何を語り、また何をするのか。それは一見すると単なる情景描写、状況説明のように思えるかもしれませんが、しかし神の前に偶然、たまたま成り行きで…ということはあり得ません。神は海辺の砂、宇宙の星さえも数えられる御方です。万物をご自身の計算のもとに置いておられるのです。つまり神のお創りになったもの、神のなさることに意味のないことはありません。それが聖書に記されたものであるならなおさらです。今日取り上げる聖書の箇所も、一見すると何の変哲もないただの状況説明です。しかしここにも神はご自分の御心、ご計画を表しておられます。ご一緒に見てまいりましょう。

### 1. 安息日

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:23 ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた。

「安息日」、ヘブル語でシャバット(שַׁבָּת)と呼ばれるこの日は本来、創世記 1～2 章に記された、神の天地創造の御業の完成を指し示すものです。

【新改訳 2017】

創世記

2:1 こうして天と地とその万象が完成した。

2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。

2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

神は「なさっていたわざを完成」させ、そして「すべてのわざをやめられた。」とあります。ここに使われている「休む、やめる」という意味の動詞シャーフアト(שָׁפַט)にこの「安息日」シャバットは由来しています。このように「安息日」とは神の御業、ご計画の「完成」を指し示す日であると言えます。

### 2. 麦畑

そしてその「安息日」に「イエスが麦畑を歩いておられた」とあります。「麦畑」と訳されているヘブル語はサーデ(סָדֵה)という名詞で、創世記 2:5 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

2:4 これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である【主】が、地と天を造られたときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

2:6 ただ、豊かな水が地から湧き上がり、大地の全面を潤していた。

神の天地創造の御業の初め「地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。」という記述で、「野」と訳されているのが聖書で最初のサーデです。草木もなく雨も降らず、耕す人もいない地、それが「麦畑」と訳されたサーデ本来の指し示す意味だと考えられます。しかし文脈からしてこれは荒れ果てた不毛の地というような意味ではなく、まだ何も始まっていない、真新しい、古いものが何一つない、全く新しい地を指し示す言葉であると考えられます。

### 3. 通っておられた

そして「イエスが…通っておられた」という記述について。ここには「渡る、進む、通り過ぎる」という意味の動詞アーヴァル(אָוַר)が使われています。この最初の言及は創世記 8:1 です。

【新改訳 2017】

創世記

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

これはノアの箱舟の出来事の一場面ですが、全世界を水没させた大洪水、それが終息していく場面を記した箇所です。ここで「神は地の上に風を吹き渡らせた」と訳されている箇所に聖書で最初のアーヴァルがあります。これによって地上から水が引き始め、大洪水が終わるのですが、聖書はその理由として「神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた」からであるように記しています。また「風」はヘブル語でルーアハ(רוּחַ)と言い、本来は「神の霊、聖霊」を意味する言葉です。ですからアーヴァルには本来、神が「覚えておられた」者たち、神が目を留められ、そして御自身の「霊」ルーアハを注がれる、選ばれた者たち、神の所有となる、聖なる民を指し示す言葉であると考えられます。ちなみにこのアーヴァルは、イスラエルの民の別称である「ヘブル人」の意味であるイヴリー(עִבְרִי)の語源ともなっている言葉で、このことからイスラエルの民、ユダヤ人とそれにつながる人々(異邦人)がそれであることが表されていると考えられます。

これらのことから「安息日に、イエスが麦畑を通っておられた」という記述、出来事には、神のご計画の完成とは、イエシュアによって、全く新しい地に、イスラエルの民をはじめとする神がお選びになっ

た人々が置かれる、導き入れられるというメッセージが「型」、たとえとして表されていると考えられます。

#### 4. 弟子たち

そして続く「弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた。」という記述について。これは前の「イエスが麦畑を歩いておられた」という文章のパラレリズム（対句）として、その出来事の内容を別の視点から補足説明しています。ですからこれが指し示す意味、「型」としてたとえられているものも同様であると考えられます。一つひとつの言葉を拾い上げてその指し示す意味を考えてみたいと思います。まず「弟子たち」について。これをヘブル語でタルミド(תלמיד)と言い、「学ぶ、教える」という意味の動詞ラーマド(למד)の派生語です。この最初の言及は申命記 4:1 です。

【新改訳 2017】

申命記

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

神がイスラエルの民に対して「教える掟」、ここに聖書で最初のラーマドがあります。そしてそれは神がイスラエルに「与えようとしておられる地に入り、それを所有する」ことを指し示しています。このように「弟子たち」の語源であるラーマドが本来指し示している内容も先の「イエスが麦畑を歩いておられた」という記述が指し示していたものと同様のものであることがわかります。ですからこの「弟子たち」とは神の国の民としてのイスラエル（とそれにつながる異邦人）を指し示していると考えられます。

#### 5. 進みながら

そしてこの「弟子たち」が、「道を進みながら」とあります。ここに使われているヘブル語は「歩く、進む」という意味の動詞ハーラフ(הלך)です。この最初の言及は創世記 2:14 です。

【新改訳 2017】

創世記

2:10 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。

2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。

2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシュルの東を流れていた。第四の川、それはユーフラテスである。

エデンの園から湧き出た川が「流れていた。」と訳されているのが、ハーフ本来の意味です。この川の流れはエデンの園だけでなく、全地を潤し、金や宝石までも生み出すという、豊穡と繁栄をもたらす、地に祝福を与える存在であったことが記されています。ですから「弟子たちは、道を進みながら」という記述には、全地を祝福するイスラエルの民、すなわちイスラエルの子孫によって地上のすべての人々が祝福されるという、以下の神がイスラエルにお与えになった約束の御言葉の、その成就を指し示していると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

これは神がアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルに与えられた約束の御言葉です。エデンから流れ出た川が四つに分かれて全地を祝福したように、イスラエル子孫は四方すなわち「西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。」ことが約束されています。

## 6. 穂を摘む

次に弟子たちが「穂を摘み始めた」という記述について考えます。「穂」はメリーラー(מְלִיָּאָה)、そして「摘む」はカータフ(קָטַף)と言い、どちらも申命記 23:25 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

申命記

23:24 隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。

23:25 隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使つてはならない。

「あなたは穂を手で摘んでもよい」ここに聖書で最初のメリーラー、またカータフがあります。これは神がイスラエルの民に与えられた律法の一つです。現代の社会では犯罪になりそうな行為ですが、当時のイスラエルではそれが許されていました。しかし「かごに入れてはならない」また「鎌を使つてはならない」とあるように、隣人のものを取り尽くしてしまわないように制限も設けてありました。だからイエシュアの弟子たちは自分たちの畑でなくても勝手に「穂を摘み始め」ることができたのです。このようにこの律法は、貧しい者に惜しみなく分け与えることを合法化、義務化した掟、規定であると解釈

できますが、同時に神がエデンの園において、最初の人アダムに命じられた命令をも指し示していると考えられます。それはすなわち

【新改訳 2017】

創世記

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

これはエデンの園において神が人に「命じられた」最初にして唯一の命令です。このように隣人のぶどう畑と麦畑に関する規定と同じように、「思いのまま食べてよい」とされながらも、「しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない」というような制限が設けられています。ですから弟子たちが麦畑で「穂を摘み始めた」という行為は申命記 23:25 の律法を通して、神の国のひな型であるエデンの園を指し示し、そしてそこで神の命令に聞き従って生きることを表していると考えられます。

このように「弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた」という記述には、イスラエルの子孫によって地上のすべての民族は祝福され、神の国において、神の命令に聞き従いつつ、思いのままに生きるというようなメッセージが「型」、たとえとして表されていると考えられます。

## 7. 律法

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。」

神は、イエシュアは安息日に麦畑を通り、そして弟子たちに麦の穂を摘ませることで神のご計画の完成である神の国の「型」を表しておられたのです。しかしこのたとえの意味を理解できないパリサイ人たちはその行為を非難しました。たしかに律法によれば弟子たちの行為は労働にあたり、安息日には仕事をしてはならないという律法に違反したことになります（出エジプト記 20:8～11、申命記 5:12～15）。しかしパリサイ人たちは安息日を働いてはならない日、そして律法全体を禁止と命令の事項としてしか理解していませんでした。しかし今日取り上げた申命記 23 章の隣人のぶどう畑と麦畑に関する規定がエデンの園を指し示していたように、神は律法をご自身のご計画を指し示すものとして人にお与えになったのです。そしてその完成を指し示し、人にそれを覚えさせ、待ち望ませるために律法は存在するのです。ですから聖書は、神の御言葉は私たちを束縛し、強制するものではなく、むしろそのようなものから私たちを解放し、祝福を与えるためのものなのです。神は私たちに良い計画を持っておられます。ですからそれがどのようなものであるかを知ることが求め、またそれが成就する日を求めて祈りましょう。御国が来ますように。